

Newsletter No. 6

Maxillofacial Prosthetics

発行人 後藤昌昭

編集 広報委員会

事務局 T135-0033 東京都江東区深川2-4-11 一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内

Tel: 03-5620-1953 Fax: 03-5620-1960

E-mail: max-service@onebridge.co.jp

認定医制度が発足しました

認定医制度検討委員会

委員長 石上 友彦

近年、医療の質の向上や医師間あるいは患者との良い関係を構築するためにも診療にあたる医師、歯科医師に関する医療背景の開示が進められています。このような社会の流れの中、社会に顎顔面補綴治療の専門性を周知していただくうえにも、まずは認定医制度を構築する必要がありました。平成19年7月20日(金)に開催された第24回顎顔面補綴学会総会(岩手)において、本学会の認定医制度が承認され、現在、暫定処置として平成22年7月19日まで認定医制度規則に準じて申請を受けています。

顎顔面補綴学会は口腔外科学、歯科補綴学、放射線学あるいは歯科技工学、歯科衛生学、言語療法学など多岐にわたる専門性を基盤とする学際的分野であり、本会の会員は、歯科医師をはじめ医師、歯科技工士、歯科衛生士など多くの専門職種から構成されていることが特徴です。しかし、認定医制度の発足にあたり、これらの職種すべてを網羅する認定医制度を同一の認定条件のもとで設立することは難しく、今回は、その最初として歯科医師、医師を対象とした認定医規定を制作しました。今後、他の職種についても認定制度も構築

して行きたいと考えています。

学会がさらに活性化していくためにも、多くの会員が認定医を取得するようお願いいたします。

広報委員会より：認定医制度の詳細ならびに申請方法は、学会ホームページに新設されました「認定医」のコーナーをご覧下さい。

第24回学術大会報告

平成19年7月20日(金)、21日(土)、いわて県民情報交流センター(アイーナ)において水城春美総会長のもと第24回日本顎顔面補綴学会総会および学術大会が開催されました。

第24回学術大会レポート



第24回日本顎顔面補綴学会総会
総会長 水城 春美
岩手医科大学歯学部
口腔外科学第一講座

平成 19 年 7 月 20 日（金）・21 日（土）の 2 日間にわたり、盛岡市のいわて県民情報交流センター（アイーナ）において第 24 回総会・学術大会を開催いたしました。

今回の学術大会は、一般講演が 34 題、特別講演が 1 題で、参加者は事前登録と当日登録を合わせて 141 名でした。盛岡は北東北に位置し、西日本の先生方には参加しにくい場所なので、参加者が少ないのでないかと心配していましたが、予想を上回る多数の方にご参加を頂き、大変感謝しております。

一般講演の発表はすべて PC による口演発表をして頂き、ほぼスムーズに進行しました。一般講演の演題は多岐にわたりましたが、それぞれが内容のある有意義なご発表で、質疑応答も予定時間をフルに使って、大変活発になされました。

特別講演は、岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座教授 原田英光先生に講師をお願いし、歯の再生に関する研究について講演して頂きました。最新の研究成果と今後の臨床応用の可能性について拝聴することができ、顎顔面補綴の将来の新しい治療法を示唆する大変有意義な講演であったと思います。



いつものように熱気のこもった討論の場となった学会場（アイーナ）

第 12 回の教育研修会は、「顎顔面補綴におけるチームアプローチ」のテーマで行われました。岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座の伊藤創造先生、北海道医療大学心理科学部言語聴覚療法学科の今井智子先生、愛知県がんセンター中央病院頭頸部歯科の長縄弥生先生、九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座の松山美和先生によ



会員懇親会では岩手の山海の珍味を味わいながら話に花が咲きました

り基調講演がなされ、次いで講師の先生方と参加者の間で活発な討議がなされました。今回の教育研修会では、顎顔面補綴治療に対する考え方や姿勢などについて講演ならびに討議がなされ、その内容に深い感銘を受けました。

総会では次々期総会長に愛知学院大学歯学部口腔外科学第二講座教授 下郷和雄先生が推薦され、承認されました。学術大会初日の午後 7 時から、会場近くのホテルメトロポリタン盛岡ニューウィングの宴会場において会員懇親会を催しました。約 100 名の先生方が参加され、大変和やかな楽しい会になりました。

当日学会に参加して下さいました会員の皆様、教育研修会の講師の先生方、特別講演講師の原田英光教授、また無理にお願いして座長をお引受け頂きました先生方、ならびに役員の皆様に心から感謝申し上げます。



真剣そのものの利き酒大会出場者（会員懇親会）

特 別 講 演

幹細胞を用いた歯科再生研究の現状と 臨床への展望と課題

原田 英光

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座教授

講演の冒頭で述べられたように、歯の欠損や喪失に対する治療は、欠損域を人工物によって置き換えるという手法であり、この基本的な考え方は1400年以上も前から大きく変わることはない。実際に、顎顔面補綴で用いられる各種の装置は、身体に用いられる「人工物」として最も大きくて複雑なものである。それに対して、再生医療は喪失した臓器や組織を新たに作り出し機能させるものであり、歯の再生技術の確立は将来の新しい治療法として期待されている。そこまではわかつっていても、再生医療との間にまだまだ縁遠さを感じて理解を怠っていた者にとって、今回の特別講演は歯科再生研究の現状と展望を非常にわかりやすく整理した形で示していただき、まさにタイミングの企画であった。

まず、演者は近年の歯科再生研究の発展を促した3つの発見を紹介された。1つ目は歯胚の器官培養技術。2つ目はscaffoldと呼ばれるゲル状のコラーゲン（あるいはPGA）による幹細胞培養の足場の開発。3つ目は歯や歯周組織の体性幹細胞の発見である。この発生学的発見と細胞工学的手法をもとに、歯科再生研究の初期には、ばらばらにしたブタの歯胚細胞をPGAに定着させてラット腹腔内に移植する実験が行なわれた。その

結果、歯牙様組織が形成されたことで細胞から歯を作ることの可能性が示された。このような細胞工学的な手法で作られた歯を biotoothと呼ばれている。歯の発生は外胚葉性の上皮組織と神経堤由来の間葉組織との相互作用（上皮間葉相互作用）によって起こることから、歯の再生には2種類の幹細胞が必要であり、その後研究では歯胚上皮細胞と様々な間葉系幹細胞との組み合わせによっても biotoothが可能であることが明らかとなつた。現在日本でも、細胞から再び歯胚として構築させたものを腎被膜下で育てることで、周囲に歯槽骨を形成させ、同時に biotoothを歯槽骨から萌出させることにも成功した。これはつまり、本来の歯牙形成に順じた過程に則り歯根部も再生させることができたということである。

しかし、現在の技術では元の歯の形態を再現できるまでは至っていない。また、報告されている動物実験の成果を臨床応用するには、まだまだ長い道程を要する。今、進められている歯槽骨再生などの歯科領域の再生医療を普及させる課題として、演者は3つの事を挙げられた。1つ目は、材料の開発や培養技術の簡素化などを含む再生医療のための技術基盤の整備。2つ目は、安全性を担保するためのin vitroからin vivoに至る再生医療評価システムの開発。3つ目は教育システムの確立であり、細胞培養技術を備えた歯科再生医療専門医の育成などである。

最後に会場からの質問に答えて演者が言われた言葉、「歯科再生研究はアポロ計画と同じようなものである」が非常に印象的であった。つまり、月に行くという目的自体よりも月に行くために試行錯誤を重ねる過程で開発されたさまざまな技術が今日多分野において活用されているのと同じで、歯の再生研究における技術開発が今後の歯科医療を変えていく可能性を秘めているということだと理解でき、臨床の現場からもこの分野の研究者に心からエールを送りたいと感じた次第である。

（小野高裕）



第12回教育研修会

日本顎顔面補綴学会第12回教育研修会は平成19年7月21日学会2日目の9時半より開催された。今回の研修会のテーマは「顎顔面補綴におけるチームアプローチ」であり、座長に鶴見大学歯学部診療教授の野村隆祥先生、講師には岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座の伊藤創造先生、北海道医療大学心理科学部言語聴覚療法学科の今井智子先生、愛知がんセンター中央病院頭頸部歯科の長縄弥生先生、九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座咀嚼機能再建学分野の松山美和先生をお迎えして行われた。

I. 顎顔面補綴におけるチームアプローチ 補綴治療における他科との連携



めのメソッドの解説を、参考文献などをお示しいただきながら行っていた。

我々が行う顎顔面補綴治療とは、顎顔面口腔領域において後遺した実質欠損部を人工装置により修復し、失われた機能を回復するという目的が示すとおり、患者の社会復帰の面で、重要な役割を担っているが、実態調査としてチーム医療がどのように行われているのかは明らかとされていなかった。

そこで、今回の伊藤先生のご講演にて、その実態を明らかとしていただいた。アンケート調査を行い、アンケート対象者を顎顔面補綴学会評議員とし、高い回収率にて得られたアンケート調査の結果を統計学的手法を用いて今日の顎顔面補綴の現場のチーム医療の実態をお示し頂いた。これにより、顎顔面補綴の現場で行えていること、改善を要する点、抱えている問題点、欠落しやすい部分などを明確にしていただくことが出来た。

また、次に岩手医科大学における実際の臨床例を挙げ、症例ごとに行われたチーム医療の詳細、各患者ごとに行われている歯の健康診査などといった工夫点をご紹介くださることで、今後のわれわれのチーム医療でなされるべき改善点、留意すべき点などを明確にしていただけるご講演であった。

II. 顎顔面補綴によるリハビリテーションと チームアプローチ



今井 智子先生

北海道医療大学心理科学部

言語聴覚療法学科

まず、疾患と適用される顎顔面補綴治療を具体的に挙げていただき、論文データと共に、各症例に適用される補綴装置のご説明を頂いた。その上で、それらの補綴装置の有効性を評価する方法として、チアサイドにて特別な機器を用いなくとも行える方法からPCなどを含めた音響分析機器を用いた方法までを具体的にご掲示いただいた。

機能訓練の立場から顎顔面補綴という分野を紹介し、またSTの担う役割について、先生の立場からのお考えを述べられた。STの役割にはまず、顎顔面補綴装置の有効性を客観的データに基づき評価を行い、フィードバックすることが挙げられた。補綴装置装着後に訓練を行うことで、その有効性を更に高めていくことが、STとしての役割であるとのお考えであった。

ただし、今後の課題として、STがいない施設では、他施設でSTのいる施設との連携が必要になること。また、逆にSTがいて顎顔面補綴科医あるいは補綴科医が施設にいなければ、その場合にも他施設との連携が必要になること、その際、他施設の情報とくに顎顔面補綴科医の情報がわかりづらいことが課題であるということを御提示いただいた。また、装置の有効性の評価に関しての共通のプロトコールの作成が必要なことも御提案いただき、今後の課題も明らかにしていただけるご講演であった。

III. 頭頸部腫瘍患者における術前からのかかわり



長繩 弥生 先生

愛知県がんセンター

中央病院頭頸部歯科

現在、5百床の入院施設
の中で早期退院を目指し、
術前からの口腔ケアをな
さっているお立場としての

御講演であった。先生の所属するセンターでは、口腔衛生は誤嚥性肺炎の予防に重要な要因であるなどの認識が一般的になったこともあり、センターの中で、頭頸部に関わらず他の疾患の患者に対しても、治療前から患者の徹底した口腔ケアを行っているとのことである。多岐に亘る症例を扱うということは、広範囲に及ぶ他職種との連携が必須となり、その他職種とのメンバーとの意思疎通、連絡、情報の共有が、きわめて重要である。

そのための様々な工夫のうちの幾つかを御紹介くださった。まず、全ての申し送りには他職種の判るような用語を使用すること、また図示を行うことで、ケアの内容そして注意事項が一目で判る工夫をなさっていることがわかった。そして、口腔ケアの普及のためおよび知識の共有、技術統一の為に、看護師や医師らとともに定期的に研修会や実技指導などを繰り返し行っているとのことであった。

また、リスクの高い患者を扱う頻度が高いため、医師、看護師らと連携を取り、精神状態を含めた全身の状態を確実に把握し、誤嚥などの危険性が高いと判断した患者には特に、声かけなどの注意を払い、更にはケア中からケア後に至るまで、モニターにて容態の急変などを監視しながら行うということをご説明いただいた。

長繩先生より、術前からの口腔ケアは早期の社会復帰を目指すことを目的として口腔ケアを行っているが、顎顔面領域の患者の場合、顎補綴に対応できる医院、顎顔面補綴医の情報が少ないことが、問題となっていることを御指摘いただいたき、情報の共有が行える環境作りの必要性を感じたご講演であった。

IV. 顎顔面補綴患者の社会復帰に対する支援

松山美和 先生

九州大学大学院歯学研究院

口腔機能修復学講座

咀嚼機能再建学分野

松山先生は、顎顔面補綴を、患者の社会復帰までを視野に入れた治療計画中の

一翼としてとらえ、平成16年に数名の顎顔面補綴患者とともに、「えがおの会」を発足なさっている。

今回の御講演では社会心理的アプローチは、レベル1：病院、レベル2：家庭、レベル3：社会として分けることが出来るとのご説明後、患者の社会復帰までを視野にいれた、患者を中心としたチームアプローチを考え、いかなるアプローチが必要であるかを述べられた。そこで、社会心理的アプローチが社会復帰への力となることをご説明なさった。社会心理的アプローチの具体的手法としては、グループ療法、個別カウンセリング、そして患者会とあり、それぞれに利点がある。ここで、グループ療法と患者会の違いをご説明いただいた。例えばグループ療法が医療行為であるのに対し、患者会は一般的な社会活動である点、またグループ療法が専門家主導であるのに対し、患者会は患者主導であるなど様々な相違があるという。今回先生が立ち上げに参加なさった「えがおの会」は患者主導型かつ専門家参加型という形式となっているとのことである。

「患者の社会復帰」支援の一助として、患者らのコミュニケーションの場を広げていく機会を設けるために作られたこの「えがおの会」の発足により、メンバーの写真から歴然である「えがお」が増え、また、手術前の患者や家族が「えがおの会」のことをHPで知り、代表世話人と話が出来、また歯科医師が医学的アドバイスを与えることが出来たことで、落ち着きを取り戻し手術に臨めたなど、既に効果があらわれている。

今後、これらのような趣旨の患者の会が発足し、患者相互あるいは会相互のネットワークが広がっていくことが望まれる。勿論、既に「えがおの会」においても代表世話人などの高齢化や、個人情報

の取り扱いにおける注意など、簡単に解決できない課題も出てきているが、学会として、社会心理的アプローチの必要性を認識し、その方法の一つとして、患者会というものを考えて欲しいというご提言を頂き、大変意義深いご講演であった。

(隅田由香)



第 25 回学術大会案内

日 時：2008 年 6 月 13 日（金）、14 日（土）
場 所：九州歯科大学講堂

総会長より



第 25 回日本顎顔面補綴
学会総会
総会長 鮎見 進一
九州歯科大学
顎口腔欠損再構築学分野

来る平成 20 年 6 月 13、14 日の両日、第 25 回日本顎顔面補綴学会総会ならびに学術大会を九州歯科大学顎口腔欠損再構築学分野でお世話させて戴くことになりました。本学会が九州歯科大学で開催されることは初めてのことであり、また節目である 25 回大会を本学で開催できることは、誠に有り難く、光栄に存じます。

現在のところ教育研修会は『顎顔面補綴治療の変遷 上顎腫瘍』というテーマで沖本公繪学術委

員長のもと着々と準備が進められています。

また、特別講演として、九州歯科大学形態機能再建学分野の高橋 哲教授にお願いし、仮骨延長術を応用した顎欠損への対処についてのご講演を依頼しております。

会員懇親会も例年通り開催する予定しております。

以上準備状況をお知らせしましたが、多くの会員のご参加と演題申し込みを切にお願い申し上げます。

来年、小倉でお会いできることを楽しみにしております。

関連学会報告

12th Meeting of ICRPS

12th Meeting of the International Conference on Reconstructive Preprosthetic Surgery が、Dr. John Wolfaardt 大会長のもと、平成 19 年 4 月 16 日（月）から 18 日（水）まで、サウスカロライナ州チャールストンの Hibernian Hall に於いて開催されました。

本会期中の 3 日間にわたり、“Preprosthetic Surgery and Augmentation”, “Innovation with Advanced Digital Technologies”, “Osseointegrated Implants”, “Craniofacial Osseointegration”, “The Compromised Patient” “Augmentation-Autogenous Bone Versus Bone Substitutes”, “Prosthetic Versus Soft Palate Reconstruction” と題し、各セッションにおいて、活発な質疑応答が行われてきました。

17 日の午前中は、“Colloquium on Global Trends in Implant Education and Training For the Practicing Dental Profession” が行われました。

日本からは、東北大学、東京歯科大学、東京医科歯科大学が参加し、口頭発表やポスター発表を行い、Competition Poster Presentations では、

The 1st Prize に “Analysis of Bone Metabolism Around Osseointegrated Implants Under Loading” という題目にて、（東北大学口腔システム補綴学分野、佐々木洋人先生）が選ばれました。

本大会では、「著しく骨吸収をした症例や顎頬面欠損症例における補綴前外科治療」、「Evidence Based Medicine のある歯科治療を実現するための無作為化抽出試験やメタアナリシス」、「コンピューターを利用した 3 次元情報の活用」といった話題が多く、今後のさらなる発展が、未来の歯科治療につながると期待されます。

次期大会は、2009 年ドイツ、ベルリンにて開催予定です。
(隅田由香)



ポスターセッションでは発表者が名物パナマ帽を着用

第13回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会

第 13 回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会が、植松 宏（東京医科歯科大学）教授のもと、2007 年 9 月 14 日（金）、15 日（土）大宮ソニックシティホールにて開催された。

本学会は歯科医師・医師・言語聴覚士・看護師・栄養士・歯科衛生士など、多くの職種が集まる学際的な学会である。今回の学術大会でも 3,900 名もの参加者があり、非常に盛会であった。

その中で、口腔腫瘍術後の摂食嚥下障害に関する発表は 10 題、また嚥下補助床など補綴に関する演題が 4 題あった。また、NST などの報告も多く、口腔腫瘍術後患者に対する摂食嚥下機能の回復について活発な討議が繰り広げられた。他職種の先生方とのディスカッションは新鮮であり、新たな考え方を知ることができた。（堀 一浩）

会員の声

言語聴覚士（ST）の補綴への関わり

熊倉 勇美

川崎医療福祉大学医療技術学部

ST と歯科領域との関わりは古く、昭和 37 年に口蓋裂治療談話会が発足し、昭和 53 年に日本口蓋裂学会となる長い経過の中で、共同して臨床と研究が続けられている。一方で成人の分野での関わりは希薄であったが、最近になってようやく増え始めている。

口腔癌術後や脳血管障害などの患者、いわゆる器質性構音障害や運動障害性構音障害、さらに摂食・嚥下障害に対して補綴装置を適応する試みの報告がそれである。補綴装置の内容は「舌接触補助床（PAP）」と「軟口蓋拳上装置（PLP）」に分けられる。

ST の数多くが参加する学会の中から「日本音声言語医学会」と「日本摂食・嚥下リハビリテーション学会」の 2 つを取り上げ、2003 年から現在まで過去 4 年にわたって、補綴に関する学会発表、さらに論文を調べてみると以下の通りである。報告のほとんどが、ST と歯科医師の共同研究である。

1. 日本音声言語医学会・学術講演会での発表数：6 件 同上学会学術誌での論文数：3 編（うち ST が筆頭の論文は 1 編）
2. 日本摂食・嚥下リハビリテーション学会・学術大会での発表数：12 件 同上学会学術誌での発表論文数：5 編（うち ST が筆頭の論文は 0 編）

さらに、ST の当事者団体である日本言語聴覚学会での発表数は 4 件、学術誌での論文数はまだ 0 である。

この背景には、1) 補綴医を見つけるのが難しい。2) 補綴医が見つかっても勤務する施設が遠く、患者を紹介し経過を追うことが困難なことが多い。3) お互いに経験が少なく、十分に効果的な装置を作ることが難しい。といったことが挙げられよう。今後、さらにこの領域での活発な研究発表と論文化が望まれるところである。

Newsletter No. 6

Maxillofacial Prosthetics

関連学会の案内

第117回(社)日本補綴歯科学会学術大会

日 時: 2008年6月6日(金)~8日(日)
場 所: 名古屋国際会議場
主 管: 愛知学院大学歯学部歯科補綴学第一講座
(田中貴信教授)

3rd International Conference Advanced Digital Technology in Head & Neck Reconstruction

日 時: 2008年6月29日(日)~7月1日(火)
場 所: Cardiff, Wales UK
http://www.res-inc.com/at_2008

第14回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会

日 時: 2008年9月13日(土)~14日(日)
場 所: 幕張メッセ(千葉市)
主 管: 慶應大学医学部リハビリテーション医学
教室(里宇明元教授)
<http://www.congre.co.jp/jsdr2008/index.html>

8th International Congress on Maxillofacial Rehabilitation

第8回国際顎顔面リハビリテーション学会が
2008年9月にタイ・バンコクで開催されます。
日 時: 2008年9月25日(木)~27日(土)
場 所: Royal Orchid Sheraton Hotel, Bangkok, Thailand
参加費: JAMP メンバーは規定の団体会員費(正
会員費と非会員費の間の額で、具体的な
額は、現在、未決定)

コンテンツ

認定医制度が発足しました	1
第24回学術大会報告	1
第25回学術大会案内	6
関連学会報告	6
会員の声	7
関連学会案内	8

皆様のご意見をお寄せください。

日本顎顔面補綴学会広報委員会
委員長 小野高裕
委員 大慈弥裕之, 冲本公繪, 熊倉勇美,
隅田由香, 又賀 泉, 山口能正
幹事 堀 一浩
TEL:06-6879-2954, FAX:06-6879-2957
E-mail: ono@dent.osaka-u.ac.jp
〒565-0871 吹田市山田丘1-8
大阪大学大学院歯学研究科 顎口腔機能再建学講座